中学生の被援助志向性と学級内要因の関連（要旨）

学校構想サブプログラム

小鹿野　詩織

【指導教員】　中井　大介　　萩生田　伸子
【キーワード】 被援助志向性　　学級風土　　担任　　中学生

１．問題と目的

生徒たちにとって学級とは、家庭と同じくらい長い時間を他者と共に過ごす場所である。この学級が暖かく柔らかい雰囲気であることやその中で一緒に生活する教師や友人たちとの関係が良いことは、いざ悩みや心配事を抱えた時に彼らに相談してみようとする思いを促進するだろうと考えられる。本研究は，担任教師として日頃から生徒とどのような関係を築き、どのような働きかけを行い、どのような学級風土を築いていくべきかという指針になる可能性がある。

そこで、担任教師との関係性や担任教師の働きかけが直接、または「自然な自己開示」という学級風土を媒介して、学級内の被援助志向性とどのように関わるのかということを検討するために、以下の２点の仮説を設定した。

仮説１　担任教師の欲求支援行動（「自律性支援行動」「有能感支援行動」「関係性支援行動」）に対する認知は、直接的に学級内の「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」に負の影響、「被援助に対する肯定的態度」に正の影響を与える。

仮説２　担任教師の欲求支援行動に対する認知は、学級内の「自然な自己開示」に正の影響を及ぼし、その学級集団の雰囲気を媒介して間接的に、学級内の「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」に負の影響、「被援助に対する肯定的態度」に正の影響を与える。

２．方法

2023 年 10 月中旬から下旬に中学校 A 校の生徒 524 名を対象に調査を行い、男子 215 名、女子 211 名、答えたくない 18 名の計 444 名から有効回答を得た。調査には以下の３つの尺度が使用された。

（１）欲求支援行動尺度　　肖・外山（2011）の「欲求支援・阻害行動尺度」から、3 つの「支援行動（自律性、有能感、関係性）」因子 12 項目について 7 段階で回答を求めた。

（２）学級風土尺度　　伊藤・宇佐美(2017)の「学級風土尺度」から、「自然な自己開示」因子 3 項目について 5 段階で回答を求めた。

（３）被援助志向性尺度　　本田・新井・石隈（2011）の「友人、教師に対する被援助志向性尺度」から、「懸念や抵抗感の低さ」「肯定的態度」の２因子 13 項目を用い、「対担任教師モデル」と「対友人モデル」の２パターン、計 26 項目について 4 件法で回答を求めた。

３．結果と考察

担任教師の「自律性支援行動」は、対担任教師においても対友人においても「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」を下げることが明らかになった。このことから被援助志向性を高めるために、教師が「自律性支援」を行うことの重要性が改めて示唆された。

一方で、基本的心理欲求充足の３つの支援をバランスよく行うことの重要性も明らかとなった。担任教師が「有能感支援」のみを行うと、友人への相談時の評価懸念を高める可能性も考えられるためである。

最後に、欲求支援行動の中でも「関係性支援行動」が「自己開示」を媒介し、間接的に教師や友人への被援助志向性を高めることが明らかになった。学級単位での援助要請を考えた時に、担任教師の働きかけの中でも対人関係に関わる行動である「関係性支援行動」が特に重要な要因である可能性が示唆された。担任教師が個別の支援はもちろんのこと、学級経営や学級づくりといった集団介入も同時にバランスよく行うことで、「自己開示」の風土が醸成され、学級内資源へ相談するようになることが期待できる。

主な参考文献

中井大介（2022）．担任教師に対する信頼感と援助要請意図および援助要請行動の関連 ： 中学生の担任教師に対する援助要請プロセスの検討　共生教育学研究，117-123.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American Psychologist, 55(1), 68–78.

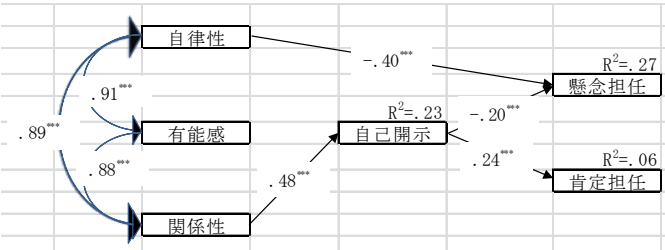

Figure1　担任教師に対する被援助志向性モデルの検討

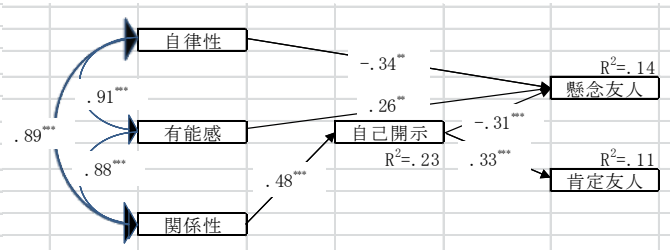

Figure2　学級の友人に対する被援助志向性モデルの検討